

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・・



2019年
9月9日
第72号

アレクサンドリアセンナ

(マメ科)

今、第二圃場で、くっきりとした黄花を咲かせています。湿度を極端に嫌うので日本での栽培が難しく、園でもしばらく見られませんでした。日本薬局方に収載されている生薬「センナ」の基原植物には、熱帯性低木でインド西南部のチンネベリー地方で栽培されたチンネベリーセンナと呼ばれる品種と、ナイル河中流域、アレクサンドリア地方で栽培された品種の2種が割り当てられていますが、現在ではどちらも同じ種とされ、この和名となっています。センナは世界最古の医学書「エーベルス・パピルス」にヒマシやアロエと共に下剤として記載されているそうです。薬用部位は乾燥した小葉で、主に粉末として用います。なお、茎以外（葉軸と葉柄も）は専ら医薬品なので、取り扱いには注意が必要です。有効成分はセンノサイドで、腸内細菌による代謝を受け瀉下作用を示します。



ヘチマ (ウリ科)

第一圃場で黄色の雄花、雌花と長い果実がぶら下がっているのが見られます。熱帯アジア原産のつる性の1年草です。熟すと強い繊維質の網状の組織が果肉中に発達し、それを乾かしたものがヘチマタワシです。夏、茎を切って根が吸い上げる水を集めたものがヘチマ水で、一晩で2リットル近くになり、これを化粧水にします。民間では生の果実を煎じて、鎮咳、利尿を目的に用います。また若い果実は食用に、蕾や若葉は天ぷらにすると美味しいです。花は雌花と雄花が別々に存在するので、実の数は花の数よりずっと少ないです。